

「放浪の画家ピロスマニについて —彼の夢と故郷のグルジア」

講演者：はらだ たけひで（原田健秀）

<講演者略歴>

はらだ たけひで（原田健秀）

1954年生まれ。1989年に絵本第1作「パシュラル先生」で産経児童出版文化賞入賞。1991年の「フランチェスコ」でユニセフ＝エズラ・ジャック・キーツ国際最優秀絵本画家賞を受賞。創作絵本、挿画など多数あるが、ピロスマニ関連では、絵本「大きな木の家——わたしのニコ・ピロスマニ」、評伝「放浪の画家ニコ・ピロスマニ——永遠への憧憬、そして帰還」がある。1975年より岩波ホールに勤務、企画・広報を担当している。

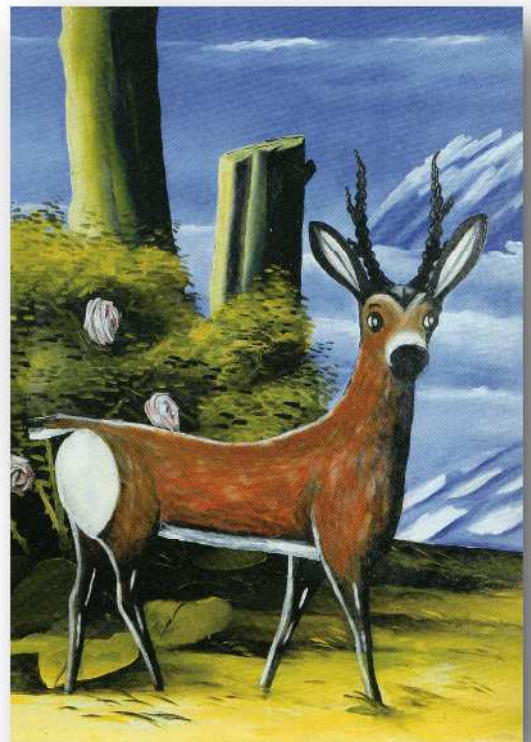
<講演内容>

ピロスマニはコーカサス山脈の南にあるグルジアで、十九世紀半ばから二十世紀初頭にかけて放浪の生涯を送った画家である。「百万本のバラ」で歌われる貧しい画家のモデルでも知られている。彼はチフリス（現在の首都トビリシ）の街を転々としながら、日々のパンや酒とひきかえに居酒屋に飾る絵や看板を描いた。その多くはグルジアの人々の暮らしや伝説、動物たちを描いたものだ。彼の絵や人生をとおして、夢や憧れにとりつかれた芸術家の運命を考えたい。



↑ ツヘニスツカリ河畔の祭

小鹿のいる風景 →



グルジア(グルジア政府の要望により日本での呼称がジョージアに変わるようですが)はコーカサス山脈の南、黒海の東に位置する小さな国です。広さは北海道の84パーセントくらいでしょうか。グルジアの歴史は紀元前3000年にも遡るといわれ、この国を語るのに欠かせないワインは紀元前5000年以上も前にこの地域で誕生したといわれています。ギリシャ神話の王女メディアや金羊毛が登場するアルゴ船遠征の舞台であり、旧約聖書のノア方舟が漂着した場所は、この国の南にあるアルメニアのアララット山です。キリスト教を国教としたのは4世紀、アルメニアに次いで世界で2番目。現在の首都トビリシの都が、ヴァフタンク・ゴルガサリ王によって作られたのは5世紀半ば。その息子の手によって6世紀に近郊のムツヘタから遷都されました。グルジアの人々は独自の言語と文化、風習をとて誇りに思っています。しかしこの地はシルクロードの重要な要の地域であったように、その地位的な特性によって戦争が絶え間なく、周辺の国々によって侵略の憂き目にあってきました。

トビリシはなだらかな稜線の山々に囲まれ、中央をムトゥクヴァリ川が悠々と流れ、石畳の坂道が旧市街を網のように走り、異国情緒に溢れる街です。この地では自転車を見かけません。坂が多く、道の石が荒く足をとられるためでしょうか。かつてふたつの顔を持つヤヌス神に例えられたように、この地の風俗文化は西洋と東洋の文化が融け合って味わい深く、透かし彫りのバルコニーがある木造建築は美しく魅力的です。そのような集合住宅には中庭があり、空にレース模様のようにはわせた葡萄のツタが美しく印象的。ワインはもちろんのこと、スパイスのきいた肉や野菜の料理も絶妙な味わいです。マルコ・ポーロはこの街を絵のように美しいと称え、詩人のマヤコフスキーは夜景を、銀河が谷間に休んでいるようだと言っています。

1991年までソヴィエト連邦の1共和国だったグルジアは、連邦の解体と前後して独立。しかし急進的な民族主義者が大統領となり、多くの民族が共存していたこの国は分裂、互いに銃を向け合う内戦となり、一時はこの国が無くなるのではと危惧するほどでした。経済的にも壊滅的に落ち込みましたが、2004年のサアカシュヴィリ大統領によるバラ革命によって回復の方向に向かいました。しかし彼の強力な親米路線は大国ロシアとの対立を深め、2008年に起きたロシアとの交戦は記憶に新しいと思います。現在は数年前に誕生した新政権によって、ロシアとの交流の兆しが見られるようになりました。

このようにグルジアはこの10年だけでも激しく変化しています。街並も同様で、2009年に訪れたときはインフラが悪く、新しい建築も中断し、人々は窮乏する中で工夫して生きているように見えました。しかしその数年後に行くと、未来的な建造物が街の中央部にいくつも出現し、正直戸惑いました。何よりも違和感を覚えるのは、空を切り裂くように走るロープウェイでした。古都の佇まい、景観を台無しにしているように思えました。世界における都市のグローバル化、均一化はこのユーラシア大陸の奥にまで広がり、灰色の社会主義時代の建造物は色とりどりのパステルカラーに塗り替えられ、街を歩く人たちは携帯電話でビジネスに忙しく、お洒落な店が並ぶ一方で人々の貧富の差は広がっているようです。最近行った人に話を聞くと、より一層観光に力を入れているのでしょうか。二階建ての観光バスが走り、観光案内所もあちこちにでき、目抜き通りには日本料理店もあるということです。急速にテーマパークのようになっています。

画家ピロスマニに変わりはないでしょうか。ピロスマニは19世紀半ばから20世紀初頭に生きた放浪の画家です。本名はニコ・ピロスマナシュヴィリ。「百万本のバラ」で歌われた貧しい画家のモデルとして知られていません。私は1978年にこの画家の伝記映画「ピロスマニ」の公開に携わったことを通して、画家とこの国への関心を深めました。

ピロスマニは、1862年に東グルジアの貧しい農家に生まれ、両親と死別し8歳の頃といわれていますがトビリシ(当時はチフリス)に移って富裕な一家に育てられます。しかし20歳を過ぎてから、この家族の下を離れて、トビリシの街なかを転々とする漂泊の日々を送るようになります。絵はまったくの独学、日々の糧と引き換えに店の看板や壁に飾る絵を描き。その数は1000点とも2000点ともいわれています。絵のモチーフは、人や動物、宴会や祭、人々の暮らしや伝説などが多く、筆致は素朴で、一見稚拙に見えるかも知れませんが、精緻な筆致であり、独特の完成されたスタイルに貫かれています。「ピロスマニを見ることはグルジアを信じること」という有名な言葉があるように、グルジアの歴史と民族文化を抜きにしては彼の絵は語れません。晩年の一時期、中央の画壇に注目されたこともありましたが、1918年、貧困のうちに人知れず亡くなりました。

ピロスマニの死後、評価は高まり、国立美術館には作品が常設され、今やグルジアでは彼を知らない人はいません。この国へ行くと、誰もがピロスマニを愛し、誇りに思っていることを実感します。しかし最近、その質も少し変わってきているようです。インターネットで検索してみると、劇団四季ばりのミュージカルが上演され、その名前ファッショブランド、ホテルなどを所有する観光チェーンまで出てきます。昨年には不明とされていた墓の発掘騒動まであったようです。人々が貧困を脱し、豊かになることに異存はありませんが、わが国や多くの経済大国が辿ってきたような、節度のない商業主義にピロスマニの純粋な魂まで汚されるのではないかと私は心配しています。はたして天国のピロスマニはこの地上の様子を眺めてどのように思っているのでしょうか。

ピロスマニとグルジアについて、さらにご関心のある方は、拙著「放浪の聖画家ピロスマニ」(集英社新書ヴィジュアル版)、「放浪の画家ニコ・ピロスマニ——永遠への憧憬、そして帰還」「大きな木の家——わたしのニコ・ピロスマニ」(富山房インターナショナル)をお読みいただければ幸いです。

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.org
URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan